NTT DATA

Agile Japan 2026

AI時代のプロダクトデリバリーとアジャイル

2026/11/13

© 2026 NTT DATA Group Corporation



好きなもの・興味のあるもの

- 散歩
- お笑い
- 音楽、ギター
- 仏教
- ワークショップ（WSD46期受講中）

略歴

2014卒：アパレル5年弱

2019～：SEとして受託開発会社へ
アジャイルやDevOpsに出会い実践

2024～：NTT DATAにJoin
銀行や公共系案件でアジャイル導入支援

最近はエンタープライズ開発における
AIネイティブ開発プロセス適用のPoCで手を動かしています

株式会社NTTデータグループ 技術革新統括本部 AI技術部

岡村　弦（おかむら　げん）

© 2026 NTT DATA Group Corporation

AIで作る速さは上がった。その速さを何につなげるのか？



© 2026 NTT DATA Group Corporation

品質基準・開発規約を維持したAI活用

品質基準・開発規約を維持し、AIと人の役割を組み込む



出典：NTT DATA「AIネイティブ開発」（https://www.nttdata.com/jp/ja/-/media/nttdatajapan/files/services/adm/ai-native.pdf）

© 2026 NTT DATA Group Corporation

受け入れ試験は通過したが、規約違反が残った

AIで成果物を速く生成できた

期待どおりに動作したが、レビューで規約違反が発覚

業務要件の検証に加え、規約への準拠も検証する

© 2026 NTT DATA Group Corporation

検証の課題：人は判断の根拠を示し、説明責任を果たす

人：検証と説明責任

大量の成果物から、まれな誤りを検出する
前後の成果物との整合性を検証する
根拠を示し、提供の判断を説明する

AI：指示遵守の限界

長い対話の中で前提や情報が欠落する
修正を重ねると、指示から逸脱する
自己評価のみでは誤りを見落とす

検証の根拠をそろえ、人が提供の判断に責任を持つ

© 2026 NTT DATA Group Corporation

作れることと、届けられることは別である

作れる：成果物を生成できる

届けられる：品質・規約・リスクの検証を通過

価値を確かめられる：利用者の反応で次を変える

© 2026 NTT DATA Group Corporation

外部調査も同じ問題意識を示している

79%

AIで個人の生産性は向上

デリバリー全体は

同じペースでは高速化していない

85%

ボトルネックが移ったと回答

コードの作成から

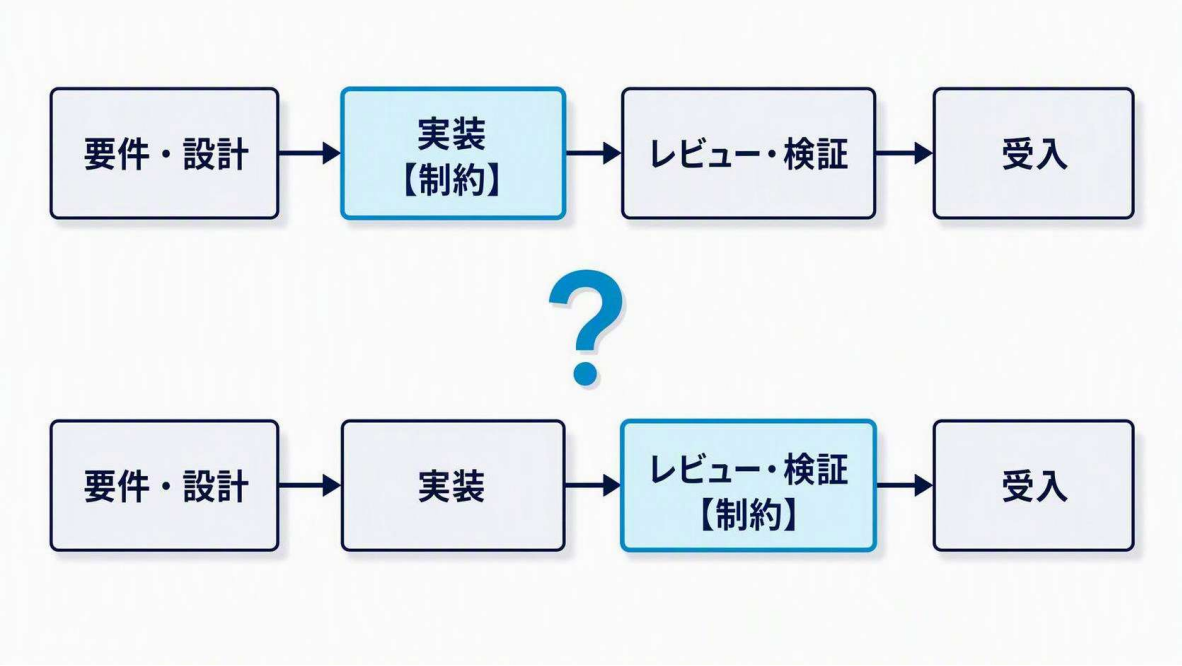
レビュー・検証へ

出典：GitLab「The 2026 AI Accountability Report」（2026年6月）
（https://about.gitlab.com/press/releases/2026-06-23-gitlab-research-reveals-organizations-are-generating-ai-code-faster-than-they-can-control-it/）

© 2026 NTT DATA Group Corporation

実装は、本当にボトルネックだったのか？

だから、利用者に価値が届くまでの流れ全体を見る



© 2026 NTT DATA Group Corporation

生成の速さを価値提供につなげる三つの観点

作れる量ではなく、確かめきれる量で流す

流れを見て、どこで、なぜ止まっているかを見つける

確かめきれる量に絞り、結果から次を変える

①フローの観察 → ②小さなバッチとWIP → ③短いフィードバック

© 2026 NTT DATA Group Corporation

①フローの観察：どこで、なぜ止まっているかを見つける

バリューストリームを可視化し、作業時間と待ちを分けて見る



作業時間

AIにより大幅に短縮されうる

待ち・判断・受け渡し

生成の高速化のみでは短縮されない

誰の判断を待ち、受け渡しに何が必要だったかを観察する

© 2026 NTT DATA Group Corporation

着手前の待ちと、判断中の停滞を分けて見る

何を待ち、何が判断を止めているかを観察する

「レビュー待ち」を着手前と着手後に分解する

着手前の待ち	→	レビュー・判断の所要時間
次工程の担当者が着手するまで 何が着手を阻害しているか		確認・判断が完了するまで 何が意思決定を停滞させているか

振り返りで、待ちの要因と必要な対話・判断を特定する

© 2026 NTT DATA Group Corporation

②小さなバッチ：一度に渡す変更を小さくし、誤りに早く気づく

バッチサイズ＝一度に渡す変更の量。小さいほど誤りを早期に検出しやすい

大きな変更

一括で作成する → 一括で確認する

一括で引き渡すと確認範囲も肥大化し、誤りの検出が遅れる

小さな変更

作成 → 確認 → 作成 → 確認 → 作成 → 確認 → **次の工程へ**

作成ごとに確認し、誤りを早期に検出して小規模に修正できる

小さく確認することを、小さく提供して早く学ぶことにつなげる

© 2026 NTT DATA Group Corporation

②WIPの調整：確かめきれる量に絞り、観察しながら調整する

作れる量ではなく、確かめきれる量を基準とする

バッチ **一度に渡す変更の量**	**1回に渡す変更を小さくする** 誤りに気づくまでに進む作業を小さく保つ
WIP **未完了の仕事の量**	**着手済み・未完了の仕事に上限を設ける** 完了させてから次に着手し、確認待ちの滞留を抑える

待ち・手戻り・リードタイムを観察して調整する

© 2026 NTT DATA Group Corporation

レビューが担ってきた厳密さは、前段と仕組みへ移せる

レビューが担っていた厳密さ（Rigor）はどこへ移るのか

- 前段の仕様レビュー (EARS、Gherkin、デシジョンテーブル、…)
- 第一級の成果物としてのテストスイート (TDD)
- 型システムや制約によるガードレール
- ビジネスの影響度に基づくリスクマッピング
- 継続的な理解形成 (ペアプロ、モブプロ)



https://martinfowler.com/bliki/FutureOfSoftwareDevelopment.html

出典：「2026年のソフトウェア開発を考える（2026/07版）」/ Agentic Software Engineering 2026-07 Findy Edition - Speaker Deck
（https://speakerdeck.com/twada/agentic-software-engineering-2026-07-findy-edition?slide=9）

© 2026 NTT DATA Group Corporation

機械で検証できる項目と、人の判断が必要な項目を分ける

人の判断を、解釈が必要な規約や意図・リスクに集中させる

正しく動作するか？

テストで早期に検証する

規約に準拠しているか？

検知できる規約は機械で

意図とリスクは妥当か？

人が判断する

品質を確かめて利用者へ提供し、反応から価値を確かめる

© 2026 NTT DATA Group Corporation

③短いフィードバック：結果から次を変える

利用者の反応で作るものを見直し、技術・開発方法の改善で支える

技術

正しく動作するか？

情報源 テスト・CI・レビュー

反映先 **次の作り方**

顧客価値

利用者の役に立ったか？

情報源 利用データ・顧客の声

反映先 **次に作るもの**

開発方法

プロセスは適切か？

情報源 振り返り・流れの計測

反映先 **次の進め方**

「サイクルを回したか」ではなく、「結果から次を変えられたか」を見る

© 2026 NTT DATA Group Corporation

利用者の反応まで、三つの観点をつなぐ

アイデアから提供、利用者の反応までを一つの流れとして捉える

流れを見る

提供までの待ち・判断・
受け渡しを観察

確かめきれる量に絞る

品質を確認できる単位で
利用者へ小さく提供

結果から次を変える

利用者の反応から
作るもの・進め方を見直す

提供までの時間と、反応を判断に反映するまでの時間を見る

© 2026 NTT DATA Group Corporation

Agile Paradox

加速するほど、アジャイルが大事にしてきた考え方が活きる

開発工程が高速化するほど **利用者への価値提供の流れを捉える**

大量に生成できるほど **確かめきれる量で小さく提供する**

生成が速くなるほど **利用者の反応を次の判断に反映する**

作る速さを、届けて学ぶ速さに変える

© 2026 NTT DATA Group Corporation



本資料に掲載されている製品名、会社名、サービス名は、各社の商標または登録商標です。